

ルーブリックって何？

中部大学 大学教育研究センター客員教授
立命館大学 教育・学修支援センター長・教授
沖 裕貴

ルーブリックとは「赤」を意味するラテン語の「ruber」から派生していると言われます。中世ヨーロッパでは、法律や典礼に朱色で言葉が書かれており、そこから権威をもって何かを指示するものをルーブリックと呼び習わすようになったそうです。

現在、大学や初等中等教育の現場で用いられるルーブリックとは、左列に評価指標（学習活動に応じたより具体的な到達目標）と、上の行に評価指標に即した評価基準（レベル）が書かれた配点表（表1、表2）のことを意味します。評価指標と評価基準に囲まれたセルには、それぞれの評価指標ごとにどの程度達成できればどのくらいの評点を与えるかのパフォーマンス（行動や内容）の特徴が記述されます。そして、これを用いた成績評価方法をルーブリック評価、あるいはルーブリックを用いたパフォーマンス評価と呼んでいます。

表1 基本的なルーブリックの構造

	評価基準 1	評価基準 2	評価基準 3	評価基準 4
評価指標 1	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
評価指標 2	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
評価指標 3	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点

表2 ルーブリックの具体例（ルーブリック作成の点検用ルーブリック：20点満点）

	もう少し工夫が必要なレベル	試用に耐えるレベル	十分に使えるレベル
評価指標が到達目標の一つ、あるいは複数に対応している。	・評価指標が測るべき到達目標に無関係に設定してある(0点)。	・評価指標が測るべき到達目標をより詳しくパフォーマンスとして記述してあるが、それが必要十分かどうかは分からない(1点)。	・評価指標が測るべき到達目標に対応し、何回かの試行を経て、到達目標を測る上で必要なパフォーマンスが網羅されている(2点)。
評価指標が求めるパフォーマンスを重複なく表現している。	・複数の評価指標に重複した内容が書かれていて、どこで採点するかに困る(0点)。		・評価指標が求めるパフォーマンスは独立している(2点)。
特徴の記述は学習の指針として分かりやすい。	・学習者が読んでも何が分かるようになるかが分からない(1点)。	・何が分かるようになることが求められているかは分かるが、基準の違いが分かりにくい(2点～4点)。	・学習の指針として明確に理解でき、基準の違いも明示されている(5点)。
特徴の記述に「まったく」「非常に」などの用語を極力用いず、適切に特徴的なパフォーマンスを記述している。	・特徴の記述が、すべて「まったく」「非常に」等の比較を表す言葉で表現されていて、基準の違いが分からない(1点)。	・一部に基準の違いが分からない表現がある(2点～4点)。	・特徴の記述がすべて適切なパフォーマンスで表現されていて、基準の違いが明確に理解できる(5点)。
評価基準は採点しやすく設定してある。	・配点の方針が不明確で、高く評価したい評価指標、評価基準がまったく、あるいはほとんど読み取れない(1点)。	・一部に不適切な配点があり、採点結果が歪むことがある(2点～4点)。	・高く評価したいパフォーマンスを正當に高く評価するとともに、基本的な間違いを含むパフォーマンスを適切に低く評価している(5点)。
すべての評点の合計が配点と一致している。	・すべての評点の合計が採点の配点を超えている／足りない(0点)。		・すべての評点の合計が採点と配点と一致している(1点)。

評価指標と評価基準によって達成水準が明確になることから、通常のテスト法では評価が困難な「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の評価に向くとされ、フィギュア・スケートや芸術作品の評価なども含めてさまざまな分野で活用されています。たとえば、フィギュア・スケートのジャンプならば、そのジャンプの種類が評価指標となり、回転数や着地の仕方が評価基準となって細かく点数化されます。

大学では、レポートや論文の評価、学生の活動や作品・演出・実験の観察評価、面接の評価、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価・相互評価などに用いられています。計算をしたり、知識の再現を求めたりする試験問題については、特にルーブリックを用いる必要はありません。

何よりも教員にとってルーブリックのメリットは、レポートを採点する時間が短くなることです。教員の中にはたくさんのレポートを採点している間に、頭の中にあつた採点基準が徐々にずれてきたという経験をした人は多いはずです。そのためにもう一度最初から採点し直したり、気になったレポートを見直したりする時間が必要となり、思ったよりも時間がかかったことがあるでしょう。それがルーブリックを用いると、そこに採点基準が厳格に書いてあり、ルーブリックの該当箇所にチェックを入れるだけですから、最後まで決してふれずに採点でき、かつ採点時間がかなり短縮されることとなります。それは言い換えると、成績評価の一貫性と公平性が確保されることであり、加えて学生の学習状況や修得状況が正確に把握できるということです。つまり、ルーブリックは授業改善に役立つ道具にもなるというわけです。

学生にとってもルーブリックは大きなメリットがあります。まずルーブリックは事前に公開されるものです。たとえば、レポートの評価では、事前にルーブリックが配られることにより、レポートで何をどのように書けばいいのかが明確になります。そのためレポートの質が飛躍的に高まったという報告が数多くあります。また、プレゼンテーションやグループ活動では、その活動にどのように関与すれば高く評価されるのか、どういう参加の仕方を期待されているのかが分かるわけですから、ルーブリックは学生の学習活動や自己評価の指針としての役割を果たすことにつながります。

さらに、ルーブリックは評価後に返却されることが理想です。学生は単に「A評価」や「C評価」だったと言われるよりも、何ができていて、何ができなかったのかを教えてもらった方が、はるかに多くを学べるはずです。つまり、次の機会にはより高い学習成果を発揮することができるようになるのです。

ここまでお話しすると、「ルーブリックって良さそう、自分も使ってみたい。でも作るのが大変なんじゃないか」と気になる方もいらっしゃるでしょう。でも、ルーブリックを作るのは、実はそれほど難しくありません。教員は日頃、ルーブリックがなくても採点しているわけですから、学生にどのようなレポートを書いて欲しいか、何が書いてあれば高く評価し、何が書いていなければ減点するのか知っています。それをあらかじめ表に記述して配ったものがルーブリックなのです。

また、多くの場合、専門が異なってもレポートやプレゼンテーション、グループ活動の採点用ルーブリックには共通点が多いものです。したがってライブラリのように大学で用いられているルーブリックを収集し、共有化することは、新たにルーブリックを用いて成績評価を試み

ようという教員にとっても大変重宝するものになるはずですが。ただし、自らの科目の採点に適したルーブリックに落ち着くまで、最低3年間の微調整が必要だとも言われています。

最後にルーブリック評価を行うと、厳格に成績を付けることになるから、単位を落とす学生が増えたり、落第する学生が増えたりするんじゃないかと心配する声があるのも事実です。しかし、客観的、公平かつ厳格な評価は、これまで感覚的に捉えがちであった学生の変化（学力や意欲）を的確に把握し、補習や科目の分割など、学生の学びを保障するための対策を提案することにつながります。これこそが、ルーブリックを用いるもっとも大きな利点だと言えるでしょう。ルーブリックは、むしろその活用によって学生の学びを促進し、修了率や卒業率を向上させるための道具であることを知っていただけると幸いです。

CU ルーブリックライブラリが今後、中部大学生の学習の指針となり、適切な教育情報をもとにした教育改善の促進につながることを大いに期待しています。

(2016年2月)